

# 高校世界史の授業における PowerPoint 導入の事例

飯 坂 晃 治

## 【概 要】

本稿は、筆者が高校において PowerPoint を用いて世界史の授業を実施した事例をもとに、世界史の授業における PowerPoint のメリットとデメリットについて考察する。そのメリットは、絵画や写真などの図版や正確な地図を提示できる点にある。しかし、ディスプレイやスクリーンなどの設置場所により板書ができなくなるのであれば、それは PowerPoint のデメリットとなると考えられる。したがって、PowerPoint の導入は、その使用環境を踏まえたうえで判断すべきである。

## 【キーワード】

世界史 歴史教育 地理歴史科教育法 IT 活用授業

## はじめに

大学では近年、PowerPoint を用いて講義を実施することが常態化しているが、これに対し高校では、現在でも板書を中心とする授業形式が主流を占めているように見受けられる。しかし、高校の教育現場でもパソコンやタブレットなどの情報端末を用いた授業の実践は増加の傾向にあり、将来的には情報インフラの整備とともに PowerPoint を用いた授業も普及してゆくと考えられる<sup>1</sup>。2016 年度まで高校の時間講師を務めていた筆者は、決して情報機器の利用を得意としているわけではないが、2016 年度の 1 年間、高校において PowerPoint を用いて世界史 A の授業を実施する機会を得ることができた。本稿はその事例の紹介をつうじて、高校の世界史の授業で PowerPoint を利用する際のメリットやデメリットについて考察することを課題とするものである。その目的は、高校において今後増えてゆくであろう、PowerPoint を用いた授業のための参考材料（あるいは捨て石的な事例）を提供することにあるが、同時に大学の講義における PowerPoint の利用方法などへのフィードバックが得られることも期待している。

ここでは事例を具体的に紹介する前に、筆者が授業を実施した状況や環境などを説明し、世界史の授業で PowerPoint を導入した目的について説明しておきたい。筆者は 2006 年 4 月から 2017 年 3 月までの 11 年間、札幌市内の K 高等学校および K 中等教育学校に時間講師として勤務した。後者は、前者を母体として開校した中高一貫校である。前者から後者への移行は、2015

<sup>1</sup> なお、実教出版からはすでにパワーポイントのスライドを含んだデジタル教材が販売されている。<http://www.jikkyo.co.jp/book/detail/17211034> (2018 年 1 月 20 日最終確認)

年度から2016年度にかけて進められた。すなわち、2015年度からK中等教育学校が1年生と4年生の募集を開始するとともに、K高等学校は募集を停止し、同校は2017年3月末をもって閉校したのである。そのため、2015年度および2016年度はひとつの校舎のなかにK高等学校とK中等教育学校が組織として併存しており、筆者の高校の時間講師としての最後の2年間はその併存期間にあっていた。2016年度、筆者はK高等学校の時間講師として高校3年生の日本史Bを担当するとともに、K中等教育学校の時間講師として中等4年生（高校1年生に相当）の世界史Aを担当した。本稿が紹介するのは、後者の授業の事例である。

そこでまず、K高等学校からK中等教育学校への移行の経緯をたどり、後者の教育課程に関して簡単に説明しておきたい。K高等学校は当初は普通科のみであったが、2000年代前半に理数系科目と英語コミュニケーションの教育を重視した特進学科を設置した。この理数系特進学科の取り組みは教育界において注目を集め、近年では文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）や、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けている。K高等学校は閉校時には普通科と理数系特進学科を合わせて8クラス編成であったが、そのK高等学校を母体として成立したK中等教育学校では、1学年のクラス数は4つに半減され、カリキュラムは理数系特進学科のものが踏襲された。K中等教育学校はグローバルな人材の輩出を目標とし、「国際バカロレア」認定校を目指しているが、英語と理数系科目に特化したカリキュラム編成は、同校における世界史の位置づけに影を落としていた。

次に、同校における世界史の授業の実施状況を説明しよう。筆者が時間講師を勤めていたとき、K中等教育学校では、高等学校の教育課程で必修科目とされている世界史Aの授業を第4学年で実施し、週2時間の授業（同校は50分授業）で2単位を修得させることとなっていた。同校では、1週間の時間割を2種類用意してA週・B週とし、それらを隔週で交互に実施している。筆者は2016年度に4年3組および4組の2クラスの世界史を担当したが、A週は火曜の1・2時間目に3組、水曜の3・4時間目に4組を担当し、B週は火曜日の同時間帯に4組、水曜日の同時間帯に3組を担当するという時間割であった<sup>2</sup>。つまり、同校では世界史の授業を週に1回、2時間連続で実施する時間割が組まれていたのである。なお、先に述べたように2015年度および2016年度はK高等学校とK中等教育学校の併存期間であったため、両校に共通する暫定的な時程が組まれていたが、これは1・2時間目、3・4時間目、6・7時間目の間の休み時間を5分に短縮するという非常にタイトなものであった。

以上から、K中等教育学校の世界史の授業状況について次のようにいうことができる。同校に入学した生徒は、理数系科目中心の教育プログラムに惹きつけられた、いわば「理系」の生徒が大半を占める。よって、世界史に対する生徒の関心は、例えば前身のK高等学校の普通科の生徒と比べてもやはり低いように感じられた。また学校の側にも、世界史という科目を軽視している側面があったことは否めないようにも思う。実際、世界史の授業を2時間連続でおこなうことは、授業を準備・実施する側にとっても、受講する側にとっても大きな負担となったことは明言しておきたい（しかも、上に述べたように、1・2時間目、3・4時間目の間の休み時間は5分間であった）。世界史の授業でPowerPointを用いたのは、上に述べたような生徒の関心を引き、かつ負担感を緩和するのが主要な目的であった。

事例の詳しい紹介の前に、K中等教育学校におけるPowerPointの使用環境について説明を加

<sup>2</sup> 生徒目線で説明するなら、例えば3組はA週の火曜1・2時間目は世界史、水曜3・4時間目は情報の授業を受け、B週の火曜1・2時間目は情報、水曜3・4時間目は世界史の授業を受けていた。

えておこう。同校では、各教室に52インチのディスプレイ（液晶テレビ）が配置されている。そのディスプレイにはApple TVが接続され、毎朝・毎夕のホームルーム時には学校からの連絡事項などが映し出される<sup>3</sup>。筆者は世界史の授業時にはディスプレイを黒板の前の中央部まで移動させ、当時使用していたMacBook AirをWi-Fi経由でApple TVに接続し、PowerPointのスライドを提示した。したがって、本稿で紹介する事例は、Mac版のPowerPointを用いたものである点には注意されたい。接続に関するトラブルは皆無ではなかったものの、ほとんどなかったように記憶している。ただし、ディスプレイがそれほど大きなものではなかったため、教室後方に着席している生徒からは「スライドが見づらい」という声が上がることがあった。こうした声には、スライドのフォントを可能な限り大きくすることで対応した（詳しくは後述するが、筆者は28～40ポイントのフォントでスライドを作成した）。また、高校の教室は大学の教室とは異なり、カーテンの遮光性が低く、教室を暗くするのが難しいため、角度によってはディスプレイに光が映り込むこととなり、一部の生徒からは「窓の光でディスプレイが見えづらい」という不満がでてくることもあった。こうした不満に関しては、有効な解決策を打ち出せなかった。筆者はPowerPointのデフォルトの書式に従い、白地の背景に黒色のフォントでスライドを作成していたが、黒板と同様に、黒色ないしは濃い緑色を背景色とし、白色のフォントでスライドを作成するのが次善の策であったかもしれない。また周知の事実ではあろうが、液晶のディスプレイではレーザーポインターが見えづらくなるため、これを用いなかったことも記しておきたい。では以下に、実施した授業に関して具体的に説明してゆこう。

## 1. 授業プリントの空欄補充作業

2016年度のK中等教育学校第4学年における世界史の授業は、筆者ともう1名の教員（この教員も時間講師であった）の2名で担当した。教科書は、近藤和彦・羽田正他『世界の歴史』（山川出版社、世A 308、2012年 文部科学省検定済）を使用した。また、もう1名の教員はPowerPointを使用しなかったため、共通のプリントを用意してそれをベースに授業を実施することとなったが、こちらも山川出版社の『世界の歴史ノート（世A 308 準拠）』を印刷し、授業プリントとして使用した。

したがって、授業ではプリントの空欄を補充する作業が基本線となった。そこでまずは、この作業をPowerPointのスライドでおこなうこととした。図1は、その空欄補充作業のスライドの一例である。まずは授業プリントの内容をスライドに入力する作業が必要になるが、前掲の山川出版社の『世界の歴史ノート』は当該教科書の教授資料にある板書例の一部を空欄にしたものであり、しかもその板書例はデジタルデータ化され、教授資料に添付されているDVDにWordのファイルで収録されているため、実際には授業プリントの入力作業そのものは苦にはならなかった。問題になったのは、書式と空欄補充作業に関するものであった。

まず書式であるが、「新しいスライド」から「タイトルとコンテンツ」のスライドを選択し、タイトルの入力フィールドには、授業プリントに即し、教科書の節のタイトルを入力する。節のタイトルには、「ヒラギノ角ゴProN W6」のフォントを使用し、文字の大きさは40ポイントとした。続いてコンテンツのスペースには、授業プリントの内容を入力する。スライドの見た

<sup>3</sup> 付言するならば、K中等教育学校はIT機器を用いた教育に力を入れており、同校では生徒一人一人にiPadが用意され、授業で活用されている

目が、可能な限り授業プリントと同一になるよう工夫しなければならないが、問題になったのはフォントの大きさである。上に説明したように、スライドを提示するディスプレイ（液晶テレビ）は52インチと決して十分な大きさではないため、後方座席に座る生徒や、視力の弱い生徒からは「フォントを大きくしてほしい」との要望が出た（もっとも、後者のタイプの生徒には視力を矯正することもお願いした）。ただし今述べたように、見た目をプリントと可能な限り同じにしたいとも考えていたので、見た目と字の大きさの両立を目指したところ、フォントの大きさは28ポイントが上限であろうという結論に至った（ちなみにフォントは、「ヒラギノ明朝ProN W3」を使用した）。ただし、スライド「タイトルとコンテンツ」のデフォルトの書式（入力フィールドの大きさなど）には手を加えなかったため、スライド周辺部の余白を狭くすると、30ポイント以上のフォントで授業プリントを再現できたかもしれないという反省は残った<sup>4</sup>。

もうひとつの問題は空欄補充作業であった。周知のように、PowerPointには「アニメーション」の機能があり、プリントの空欄補充作業はこれを利用することになった。筆者の知る限り、「アニメーション」の機能は、（少なくともMac版PowerPointでは）カーソルで文字列を選択して「開始効果」あるいは「終了効果」を選択すると、行単位で文字列を出現させたり消去したりすることはできるが、1行の文字列のなかの特定の文字のみを出現させたり消去したりすることはできない。したがって、PowerPointによるプリントの空欄補充作業は、「テキストボックス」を使用しておこなうこととした。「テキストボックス」は、Mac版PowerPointの場合、画面上方のメニューの「挿入」をクリックすると、プルダウンメニューの下の方に入力コマンドが出現する（このとき「横書き」と「縦書き」のどちらかの書式を選択することになる）。あるいは、入力フィールドではない部分をダブルクリックすることでも、横書きのテキストボックスが生成される。このテキストボックスに空欄に当てはまる用語を書き込み、アニメーションの開始効果で空欄補充の作業を再現するのである。授業プリントで空欄になっている用語は、学習事項として重要なので、字の大きさは28ポイントのままではあるが、フォントは太字のゴシック体（「ヒラギノ角ゴProN W6」）とし、文字の色も赤色とした。

本事例では、空欄に当てはまる用語をテキストボックスで作成するという作業が、単純な労力を要する作業となった。しかし、いったんテキストボックスを作ってしまうと、あとはそれをコピー＆ペーストすることで、書式の設定などをする必要はなくなる。ただし、すでにアニメーション設定をしているテキストボックスをむやみにコピー＆ペーストすると、開始効果の順番に混乱が生じる。実際にディスプレイでスライドを提示する前に、あらかじめテキストボックスが順番どおりに出現するかどうかを確認する作業は必須である。

なお、このアニメーション効果は空欄補充以外にも活用できる。例えば筆者は、授業プリントのなかで重要な箇所にアンダーラインを引かせたい場合、「下線」のコマンドを用いて文字列に下線を引くのではなく、画面上方のメニューの「挿入」から「図形」を選択し、「直線」のオブジェクトを用いてアンダーラインを作成した。この直線オブジェクトにアニメーションの開始効果を用いることで、スライド上でアンダーラインを「引く」作業を再現できるのである。「U」のアイコンをクリックして引く「下線」は、その下線だけをアニメーションで出現させたり消去したりすることはできない（下線が引かれている文字列も下線と同時に出現しないし消去させることになる）。下線のみを出現させるのであれば、直線オブジェクトを用いることになるであろう。アニメー

<sup>4</sup> 私見では、例えば大学の教室などで、プロジェクタから映写されるスライドがスクリーンにきちんと収まらないことがある場合、スライド周辺部の余白をいわば「安全弁」として残しておくことは必要かもしれないが、本校で紹介した事例のように、スライドをディスプレイで正確に表示できる場合には、余白を確保する必要はないだろう。



ション効果の使い方は様々であり、その用途は授業実践者の工夫次第で大きく広がるだろう。

## 2. 図版・映像・音楽の活用

写真や映像、音楽などを提示し、生徒に具体的なイメージを伝えることができるのは、PowerPoint の大きなメリットのひとつである。これらのコンテンツは今日ではインターネットなどで容易に入手できるようになったが、その際には著作権の問題が生じてくるだろう。法曹に疎い筆者はこの点に関して詳しい知識を持ち合わせていないが、授業担当者が自身の授業でインターネット上の写真や動画を使用する限りでは大きな問題はないようでもある<sup>5</sup>。ただし、以下ではおもに絵画や写真を念頭に置き、なおかつそれらは著作権フリーである Wikipedia や Wikimediaなどで入手したものをを用いるという前提で話を進めたい。

まず図2は、絵画や写真を用いて作成したスライドの一例である。絵画や写真のみをスライドで提示するだけでも意味はあると思われるが、図にあるように、筆者はしばしば解説事項を付け加えた。また単元で重要な人物が登場した場合、筆者はその顔写真（前近代の人物の場合は彫刻や絵画など）をスライドで必ず提示した。その際、写真のみを提示するのではなく、名前や生没年（君主の場合は在位年）、そしてその人物の事蹟などに関する簡単なキャプションも付け加えた。一例として、図3に乾隆帝のスライドを提示しているが、人物のスライドは名前を40ポイント、在位年や事蹟に関するキャプションを32ポイントで作成した（フォントはヒラギノ明朝とヒラギノ角ゴを使い分けた）。ポイントを大きくしたのは、上にも述べたように、主として教室後方に着席している生徒への配慮からである。またポイントを大きくすると、必然的にキャプションで説明できる情報の量が制限されることになるが、これは決してマイナス材料とはならないであろう。というのも、キャプションの文章量を増やすと、高校1年生を対象とする世界史Aの授業では情報過多になる可能性があるからである。そこで筆者は、キャプションの作成に際しては、世界史事典の類いではなく、おもに国語辞典などの簡潔な説明を参考にした。その際に注意しなければいけないのは、国語辞典の場合、特に欧米の人名や事件名などがその辞典の独自の表記法によって記載されている場合があるため、用語の表記法を世界史Aの教科書のものに改めなければならない、という点である。キャプションのメリットは、その人物に関して把握すべき事蹟を絵画や写真と同時に示すことができるという点にある。図3では、ウイグル人の平定や『四庫全書』の編纂など、乾隆帝の重要な事蹟を太字にしている。強調したい部分をこのように太字にしたり赤字にしたりし、あるいはさらにその部分に下線を引くことで、生徒の理解を促すことができるだろう。筆者は人物のスライドのキャプションに関してはノートテイクを指示しなかったが、自発的にメモをとる生徒も少なからずいたことは明記しておきたい。

筆者は生徒の世界史理解を深めるために、人物以外の写真も多用した。世界史Aの場合、近年の教科書には絵画や写真などの図版が多数掲載されているため、図録集や資料集などの副教材を使用していない高校も少なくないと思われる。しかし、世界史Aの教科書に掲載できる図版の数には限界があるため、絵画や写真等の図版は積極的に利用するのがよいと筆者は考える。歴史上の出来事を描いた絵画や決定的な瞬間を撮影した写真は枚挙にいとまがなく、例えば、世界史Aの教科書には載せられていないが、世界史B対応の図録集や資料集に収録されている図版を用い

<sup>5</sup> 授業におけるインターネット素材の著作権に関しては、「ICT教育ニュース 先生のための初級ICT教育講座 Vol.5『あなたは大丈夫？ ICT教育に欠かせない著作権の知識』」を参照。https://ict-enews.net/zoomin/16koza-05/（2018年1月20日最終確認）

るだけでも、必然的にスライドの数は多くなるだろう。しかし、授業のリズムや進度を考えるならば、絵画や写真を多く見せることがよりよい授業に直結するとは限らないように思う。生徒にとって印象に残り、学習事項の理解を容易にするような効果的な写真の使い方を考えるべきであろう。

PowerPointでは、絵画や写真などの上に円や矢印などの図形を重ねることで、資料の図像学的な説明をすることができる。図4は、有名な東ローマ（ビザンツ）皇帝ユスティニアヌス1世のモザイク画である。イタリア北東部、ラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂に現在もお飾られているこのモザイク画からは、当時のローマ皇帝と司教の複雑な力関係の一面が読み取れることが指摘されている<sup>6</sup>。このモザイク画は、ユスティニアヌスによるラヴェンナ征服とイタリアの東ゴート王国に対する勝利を祝福するために制作されたものである。しかし、ユスティニアヌスはそもそもイタリアの地に足を踏み入れたことはない。したがって、このモザイク画は、ユスティニアヌスの力と信仰心を宣伝する一種のプロパガンダ絵画という性格を帯びている。このモザイク画では、画面中央に皇帝ユスティニアヌスが立ち、そのすぐ右側にはラヴェンナ司教が並んでいて、二人の密接な協力関係が表現されている。しかし、このモザイク画で名前が記されているのは、ラヴェンナ司教マクシミアヌスのみである。また二人の立ち位置も重要である。両者の上半身に注目すると、司教の右肘が皇帝の左肘よりも後ろにあり、司教は皇帝の後ろに立っているように見える。しかし足元に注目すると、司教の足が皇帝のそれよりも前に出ており、司教は皇帝よりも前に立っているように見えるのである。つまり、このモザイク画でラヴェンナ司教はユスティニアヌスが世俗の支配者であることを認めながらも、教会では司教である自分が一番偉いことを示そうとしたと解釈できるのである。こうした図像解釈は生徒の関心を惹きつけやすく、とりわけルネサンスなどの単元では有用な手法といえるだろう<sup>7</sup>。

また、スライドで提示する図版は、歴史上の出来事を描いたものに限定する必要はないだろう。例えば、世界各地の文化や特徴を説明する際に、その地域の現在の社会に関連する写真を提示してイメージを喚起することも重要である。例えば筆者は、ラテンアメリカを最初に学習する時間に、国の名前と場所や地理的環境を確認したうえで、ヤクなどの家畜やポンチョなどの衣装、そしてタコスやチューニョなどの食べ物の写真を提示したのちに、歴史の説明に入った。こうした作業は、世界史Aのあとに地理Bを学習するようなカリキュラムを組んでいる場合、非常に有用である。付言するならば、筆者は世界史の授業において、食べ物の写真を折りにふれて提示した。というのも、過去・現在を問わず、食事や食文化の話は、歴史に関心を持たない理系の生徒の関心を惹きつけることができるからである。

PowerPointは絵画や写真だけではなく、映像や音楽も使用できるので、これらのコンテンツも授業を実施するうえで非常に有用である。バッハやベートーヴェン、ショパンらの曲は誰でも1度は聞いたことはあるが、どの曲が誰の作品であるかという知識が曖昧な生徒も多いのではないだろうか。逆に、例えばヴェルディは、その名前を知らない生徒も多いだろうが、楽曲はサッカーの応援歌などで有名である。このような知識を確認できるのも、PowerPointの利点であろう。

<sup>6</sup> N・マクリーン「描かれたものと語られたもの」『岩波講座 世界歴史4』月報9、1998年、4～8頁。なお、ビザンツ皇帝の正教会に対する影響力の強さは「皇帝教皇主義」なる用語で形容されることがあるが、近年では、これは誤解を招く不正確な用語であると指摘されている。根津由喜夫『ビザンツの国家と社会』〈世界史リブレト104〉、山川出版社、2008年、15頁。

<sup>7</sup> レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」やミケランジェロの「最後の審判」など、ルネサンス期の有名な絵画の図像解釈に関しては、若桑みどり『イメージを読む 美術史入門』筑摩書房、2005年などを参照。

### 3. 地図の活用

図版と同様に、歴史地図を提示することができるのは、PowerPoint のもうひとつの利点といえるだろう。先にも述べたように、近年の世界史Aの教科書には図版が多数掲載されており、当然そこには歴史地図も含まれる。その歴史地図は、山川出版社の『世界の歴史』の場合、教授資料に添付されているCDに収録されており、これをそのままPowerPointのスライドに使用することができる。教科書の歴史地図をディスプレイに提示すれば説明が容易になるのは、いうを俟たない。また山川出版社の『世界の歴史』の教授資料のCDには、カラーの歴史地図をモノクロにしたものも添付されている。これは授業プリントなどを作成する際に便利であるが、PowerPointのスライド作成においても有効に活用することができる（後述）。

さらに、教授資料に付属するCDには白地図が数種類収録されている。白地図は、インターネット上でもフリー素材のものを入手できるが、これは汎用性が高い。高校1年生に世界史を教える際、教科書の内容を教える前に、世界各地域の基本的な地形（山脈、河川、半島、海洋など）や国の場所と名前を確認する作業が欠かせない。PowerPointを活用すれば、例えば図5のように、国境線が引かれた白地図に丸囲みの番号を付しながら、国名とその場所を確認することも容易になるだろう<sup>8</sup>。スライドの作成には手間のかかる作業を要するが、世界史Aのあとに地理Bを学習する生徒がいるならば、ここで得られる知識は地理につながられるし、そうでなくとも世界のどこに何という国があるかという知識は、一般教養としても重要であろう。

また、この白地図や先述のモノクロの地図には、もう一つの用途がある。世界史の授業では、説明の際に黒板に地図を描く作業はほぼ必須であろうが、黒板に地図を正確にかつ素早く描くには熟練を要する。それに対してPowerPointは、瞬時に正確な地図をディスプレイに提示することができる。そこで、白地図やモノクロの地図を用いて、その地図に授業者が伝えたい情報を書き込めば、地図を用いた説明を正確かつ迅速におこなうことができるのである。いくつか例を提示しよう。図6は19世紀末から20世紀初頭にかけての西アジアおよび中央アジアに焦点を当てた地図である。これらの地域は帝国主義の時代、南下政策を追求するロシアとそれに対抗するイギリスの対立の場となった。この問題は世界史Aではそれほど詳しく扱われないため、図6は非常に簡単な説明となっているが、西アジアと中央アジアにおける英露両国の対立に関しては、世界史Bともなると様々な出来事が学習事項とされる。ロシアが1828年のトルコマンチャーイ条約により東アルメニアを獲得してイラン方面に進出し、また19世紀後半にブハラ＝ハン国とヒヴァ＝ハン国を保護国とし、コーカンド＝ハン国を併合して中央アジア方面で南方に勢力を拡大すると、これに対抗するイギリスは、1890年の第2次アフガン戦争に勝利してアフガニスタンを保護国とした後、イラン方面に進出した。また、高校世界史の教科書の記述レベルを少し越えるが、イギリスがチベットを経由した清朝との通商ルートの開拓を模索すると、これに反応したロシアが同じく清朝の内陸部に進出しようとして、19世紀後半にイリ事件をおこしたことを付け加えてもよいかもしれない<sup>9</sup>。以上の学習事項はやや煩瑣で、とりわけ受験生には覚えにくい出来事と推察されるが、ロシアが南下政策を目指した地域と、インドを重要な植民地と位置づけるイギリスがロシアにどのように対抗しようとしたのかを地図できちんと確認できれば、さ

<sup>8</sup> 筆者は、最初丸囲みの番号だけを提示して生徒に発問したのち、国名をアニメーションで出現させて答えを確認した。ただし、この方法には、国名を順番どおりに答えさせることしかできない（すなわち、ランダムにわかる国から答えさせるということができない）という限界点がある。

<sup>9</sup> 平野聡『興亡の世界史17 大清帝国と中華の混迷』講談社、2007年の第6章を参照。この点と関連して、日露戦争後の1907年に結ばれた英露協商で、チベットに対する内政不干渉が取り決められたことも学習事項として重要であろう。

ほど難しい学習事柄ではない。地理的な理解が試されるテーマといえよう。モノクロの地図も同様の使い方ができる。図7はやはり19世紀末から20世紀初頭にかけてのアフリカの地図であるが、モノトーンでヨーロッパ各国の勢力範囲が表示されており、そのうえにカラーの矢印でイギリスの縦断政策とフランスの横断政策を示せば、そこから1898年のファシヨダ事件を説明することは容易となろう<sup>10</sup>。もちろん、この事件の後に英仏関係が改善へと向かい、1904年、日露戦争開戦直後の英仏協商締結につながったことなどの説明も加えておきたい<sup>11</sup>。

以上のように、様々な地図を提示できることはPowerPointの強みといえるだろう。ただし、すでに地図の板書に慣れている授業者には、PowerPointは必要ないと思われるかもしれない。しかし、筆者の考えでは、フリーハンドで描いた地図にはそれを描いた者の「心象地理」が必ず反映されるように思われる。すなわち、地図をフリーハンドで板書すると、その地図を描く者の「世界観」（いい方を換えるなら、地形や国の形に対する「バイアス」）が、大陸と島の形や半島の大小、河川の流路などで示される。したがって、フリーハンドの地図は、もしそれを描いた授業者の地理感覚に誤りがあれば、生徒に誤った知識を与えることになりかねない。さらに、この「心象地理」は授業者のみならず、生徒個人の人の中にもすでに存在するのであり、授業者の「心象地理」と生徒のそれが著しく異なる場合、その生徒にはフリーハンドで描いた地図による説明が伝わりにくくなる可能性がある。こうした点をふまえるなら、PowerPointで「正確な」地図を提示することにより、「不正確な」地図による説明で生徒に誤解を与える可能性が低くなるという効果が期待され、これは世界史の授業では非常に重要なことであろうと筆者は考えるのである。

#### 4. 板書のあり方

最後に、世界史に限らず、また高校や大学など学校教育段階に関係なく、授業において重要なものは板書であろう。当然のことながら、板書の仕方にはいくつかの種類ないしは様式がある。まずは、純粋な文字による情報である。PowerPointを用いた授業では、あらかじめ板書事項を文章ないしは箇条書きでスライドに入力し、それをディスプレイに提示して生徒にノートテイクさせることができる。図8は、その一例である。また、図形などを用いれば、説明事項を図式やフローチャートで示すことも可能である。図9は、19世紀のドイツ統一をめぐる議論に関するスライドで、1848年から翌年にかけて開催されたフランクフルト国民議会において採択された小ドイツ主義を説明するものである。ここでは、小ドイツ主義が、プロイセンの主導でオーストリアのドイツ人居住地域を除くドイツの統一をすすめるようとするものであることを図示しているが、実際のスライドではアニメーションを利用して、オーストリアのドイツ人居住地域を含めた大ドイツ主義をも説明している。板書をすれば手間のかかる説明であるが、アニメーションを用いて視覚的にもわかりやすい説明をできるのはPowerPointの利点といえよう。

筆者の経験の範囲でいえば、PowerPointを用いた授業は、特に大学においては、ともすれば受講者がメモをとることを考慮せずに、スライドをよどみなく提示しながら説明する講義になりがちなる傾向があるように思う。しかし、とりわけ高校では、生徒の理解を確実にするために、スライドをとめて生徒にスライドのノートテイクをさせることも必要であろうと筆者は考える<sup>12</sup>。

<sup>10</sup> カラーの地図の上にカラーの矢印や説明文を重ねてしまうと、見づらいスライドになってしまうだろう。

<sup>11</sup> イギリス、フランス両国はたがいに日露戦争への介入を避けようとしていたため、同戦争の勃発直後に両国間の交渉が急速に進展し、英仏協商締結にいたった。この点に関しては、木谷勤「第一次世界大戦前の国際対立」『岩波講座・世界歴史 23 近代10 帝国主義時代Ⅱ』岩波書店、1969年、197～259頁；215～216頁を参照。



そのためには事前に授業をシミュレーションし、授業プリントとは別に説明を加える必要のある事項を整理して、生徒にノートテイクをさせるための板書スライドを準備する必要がある。筆者が板書スライドを作成する際に注意したのは、1枚のスライドに書く情報量を限定することで、ノートテイクにかかる時間をできるだけ短くするとともに、理解すべきポイントを明確化することであった。これもやはり筆者の経験の範囲内での話になるが、特に大学における PowerPoint を用いた授業で、小さいポイントで数行にわたる文章をスライドに記し、1枚のスライドにおける情報が過多になってしまっている事例がしばしば見受けられる。そのようなスライドから必要な情報を読み取ってメモを作成する能力も確かに重要であり、受講生のそうした能力を育成することも大学レベルでは必要であろうが、その受講生が高校生である場合には、板書をそのままノートテイクし、その後の学習にそのまま生かせるようなノート作りをさせる授業も必要であろう。

ただし、PowerPoint を用いた筆者の授業では、板書に関してある問題を抱えることとなった。「はじめに」で述べたように、授業ではディスプレイを黒板の前の中央部まで移動させて PowerPoint のスライドを提示したが、その結果、黒板を使用できなくなったのである。実は当初は、ディスプレイを黒板の横、生徒から見て教室の前方左側において授業をしていたが、教室の後方右側の、ディスプレイから最も遠いところに座っている生徒から「スライドの字がみえない」との指摘があった。そこでやむなく、ディスプレイを黒板の前におくことになった。先にも述べたように、PowerPoint のスライドを作成する際には、あらかじめ授業をシミュレーションして板書スライドを準備したが、実際の授業において生徒の理解度を確認しながら説明を進めていくと、事前のシミュレーションでは想定できなかった説明をする必要に迫られることがしばしばあった。また、事前のシミュレーションで、提示する必要のあった板書事項に気がつかなかったというミスもあった。いずれの場合にせよ、黒板の前にディスプレイをおいてしまったために、その場の判断により板書で説明をするということができなくなったのである<sup>13</sup>。タブレットではなくパソコンで PowerPoint のスライドを提示している場合なら、その場で即座にスライドを作ることでも不可能ではないが、授業を中断してしまうことになる。したがって、PowerPoint のデメリットは、環境によって板書が不自由になることにあるだろう。

このように、授業における PowerPoint の導入は、筆者と同様の環境で授業を実施する者にとっては、授業の改善どころか、むしろ障害となることもあるように思われるのである。

## おわりに

以上、筆者が高校の世界史の授業において PowerPoint を導入した事例を紹介した。最後に、本稿の所期の課題に対する答えを簡潔に記しておこう。PowerPoint を用いた世界史の授業には、メリットとデメリットの双方があるように思う。筆者が経験した範囲でいえば、絵画や写真などの図版や、とりわけ正確な地図の提示という点に、世界史の授業における PowerPoint 導入のメリットがあると考えられる。他方、ディスプレイやスクリーンが黒板の前面にあり、生徒の反応を見ながら板書で説明を補うことができなくなるならば、それは PowerPoint 導入のデメ

<sup>12</sup> 講義者の思考の「追体験」という観点から、パワーポイントを用いた授業の問題点を指摘したインターネット上の記事として、「パワーポイントのスライドを使った授業が恐ろしくつまらない理由」を参照。http://blog.share-wis.com/?p=457 (2018年1月20日最終確認)。

<sup>13</sup> 付言するならば、ディスプレイの両脇には板書できる黒板のスペースがあったが、黒板の前方中央におかれたのがテレビ型のディスプレイであったがために、そのスペースも有効活用することができなかった。すなわち、生徒目線というなら、ディスプレイの右側のスペースに板書すれば、教室の左側前方に座っている生徒にはそれがディスプレイに遮られて見えなくなったし、その逆もまたしかりであった。



リットとなろう。したがって、高校はもちろん、大学においてさえも、PowerPointの導入はその使用環境を踏まえたうえで判断しなければならないだろう。あるいは、図版や地図の提示はPowerPointでおこないつつ、説明は板書を中心に進めてゆくという折衷案も選択肢としてあるかもしれない。

高校・大学を問わず、また担当科目が世界史であるかどうかにかかわらず、学校の教員は授業を改善する必要に絶えず迫られる。将来的にも、PowerPointにかわる新たなソフトの登場やデバイスの進化、インターネットコンテンツの質的向上などとともに、新たなIT技術の活用を求められる時代が来るかもしれない<sup>14</sup>。そのような新たな情報技術を授業に導入する際に重要なのは、授業が本来どのような営みであるのか、そして、そこで教師はどのような役割を果たさなければならないのかといった点に関して、授業者各自が立ち返り確認することであろう。映像の中継や録画などによる遠隔型の授業ではない対面型の授業は本来、教員による一方向的な講義ではないはずである。受講者の反応を見ながら彼らの理解度を確認し、状況に応じて板書などにより必要な説明を加えてゆけるところに、対面型の授業の意義があるように思う。この点は、授業でPowerPointを導入する際に念頭におかなければならないだろうと筆者は考える。PowerPointはあくまでも、授業を実施するための「手段」にすぎない。流行に安易に便乗し、PowerPointを用いることが「目的」と化してしまったなら、すでにそこにPowerPointを導入する意味はないのかもしれない。

---

<sup>14</sup> さしあたり、現時点での世界史とインターネットの関係に関しては、柳原伸洋「インターネット時代の世界史——その問題性と可能性——」桃木至朗監修、藤村泰夫・岩下哲典編『地域から考える世界史 日本と世界を結ぶ』勉誠出版、2017年、262～280頁を参照。

### 1. 古代ギリシア世界

①成立と発展

- ・前8世紀頃 ギリシア人によるポリスの成立
- … (1 アテネ) や (2 スパルタ) → 植民市の成立
- ・ (3 ヘルシア) 戦争… 諸ポリスとアケメネス朝の戦い
- ・アテネ… 成人男性市民による (4 直接民主) 政の発展

②文化

- ・文学… (5 ホメロス) の英雄叙事詩
- ・哲学… ソクラテス・プラトン・ (6 アリストテレス)

図 1

図 6

### プレヴェザの海戦 (1538年)

オスマン帝国がスペインなどキリスト教の連合軍をやぶり、地中海の制海権を獲得した海戦。(イスタンブール海洋博物館蔵)

図 2

### イギリス…アフリカ縦断政策 VS. フランス…アフリカ横断政策

ファショダ事件 (1898) イギリス・フランス両軍がスーダンのファショダで遭遇・対峙。フランスが譲歩して解決。

※この後、イギリスとフランスの関係が改善

図 7

### 乾隆帝 (位 1735~1795)

外征をおこない、ウイグル人を平定して、東トルキスタンに「新疆」とするなど、帝国の版図を広げた。

また学術を奨励して、『四庫全書』などを編纂させる一方で、禁書・文字の獄を強化した。

図 3

### フランスの絶対王政

政治：絶対王政  
宗教：カトリック  
→プロテスタントを迫害

対立→第2次百年戦争へ (教 p.83)

### イギリスの名誉革命体制

政治：議会主権  
宗教：プロテスタントの信教の自由  
→反カトリック

図 8

皇帝 ユスティニアヌス … 帝国のトップ

しかし、キリスト教世界では平信徒

司教 マクシミアヌス … 帝国の臣民

しかし、キリスト教世界では皇帝よりも自分のほうが偉いというアビール

図 4

### フランクフルト国民議会によるドイツ統一の試み

ドイツ (ドイツ人居住地域)

小ドイツ主義… オーストリアを排除し、プロイセン中心で統一

大ドイツ主義… オーストリアを中心に、ドイツを統一

※フランクフルト国民議会は小ドイツ主義の統一を決議 → プロイセン王に拒否され、ドイツ統一は挫折

マジャーール人 スラヴ人

図 9

図 5

